

老若戦争

岐阜大学教育学部附属中学校 2年 松岡 巧馬

西暦二一五〇年。少子高齢化が深刻化した日本は真つ二つになっていた。この発端は、年金を払えない政府が税率を上げ続け、若者の負担が大きくなり、わずかな年金のため、高齢者の生活も苦しくなった。政府は謝罪を理由に解散してしまい、政府に向くはずの不満の矛先は高齢者は若者に、若者は高齢者にむけられた。

「そんなわけで私たち高齢軍は敵に我々の主張を認めさせるためにも、職員として君にスパイをやってもらおう。」

職員もスパイも同じだろう。と上官の涼宮さんに心の中でツッコミをしてから尋ねた。

「なぜ私に?」

「君が唯一の適性者だからだ。」

「適性?何の話ですか?」

「聞いて驚け、君には若返ってもらおう!」

「はあ?どういうことでしょうか。」

「どうって、そのままの意味だが。軍が前から研究していた技術で君を文字通り若返らせてみせよう。」

「けれど私は一般人ですし。」

「君しかない。この件は高齢軍の全てがかかっているんだ。君だけが頼りなんだよ!」

詐欺師が良く言いそうな文句だったが理由も分からないまま私は仕方なく了承した。

×××

——目が覚めた。いや何でだ!寝た記憶なんて無いのに。とりあえず状況の確認を。ここは路地裏らしいが、こんな所は見ることがない。服も着なれない若者の服に変わっている。

ちなみに私は西園寺秀樹六十五歳。高齢軍の人間だ。昔はプログラミングの仕事に就いていて今は職員のはずなんだが…

まずは移動するとするか。

そのとき、ズボンのポケットから携帯が落ちた。

画面には「今日からお前は『神谷恰十六歳』とする。どこかに泊めてもらおうといい。連絡が来るまで、待機だ。以上。」とある。

待て待て待て、察するにここは若者側の土地だと！私の容姿は…十六歳！高一ということか。落ち着け。しかし泊めてもらえといつても、さて…急に目まいがして冷たい地面が顔に当たった。

×××

目が覚めた。若干のデジャヴを感じながら

体を起こすとそこは布団の上だった。もう敵に捕まったのか私は。と考えたが布団に寝かしてくれる敵などいるのか…考えがまとまらないでいたとき

扉が開いた。振り向くと、そこにはなぜか懐かしさを覚える少女が立っていた。

「目が覚めたのね。」

「君かい？ここに寝かしてくれたのは。」

「そうだけど。」

「ありがとう。ところで君は？」

「へえ、ここで私の名前を知らないなんてあんたこの辺の人じゃないわね」

「じゃ、じゃあ誰なんだよ」

「助けてもらって何よその言い方。そちらから名乗りなさいよ。」

何なんだこいつは、初対面でしかも俺の方がどうみても四十歳以上上なのに……。

「助けてもらったのは事実だからな。不本意だが私、いや俺から名乗ろう。俺は…神谷恰だ。」

「よし、私は西園寺真紀。よろしく。」

「ちよつと待て！お前の、じいちゃんの名前とか分かるか？」

「西園寺秀…雄？」

「知らないのかよー！」

「何でそれ聞く？今関係ないでしょうがー！」

「まあ、知らないならいいよ」

「そんなことより怜、何で倒れていたの?」

「は、腹が減ったから?」

「あははは、面白いわね怜。気に入ったわ。」

遠くで雑音が聞こえた。

「何だい?この音は。」

「戦争よ。戦場が近いから音が聞こえて、うるさくて勉強ができないから迷惑してるのよ。」
体何のために戦っているのかよく分からないし。」

「それは…本当は何でだろう。」

突如、着信音がした。

何か察したのか真紀は出て行った。メールを見た。「緊急事態 現在高齢軍は攻撃を受け、ロボット兵による応戦を続けているが時間の問題だ。いますぐハッキングで若者側のロボットをとめてくれ。」という内容に整理がつかず三分固まっていた。

「いつまでそうしているつもり!」

真紀の声で我に返った。

「パソコンってあるか?今すぐ使わないとだめなんだ!」

「あるけど。」

真紀は意外にもすんなりパソコンを差し出した。

ハッキングの経験はある。仕事関連の特技だ。なるほど、高齢軍からアクセスできないものは内側からなら可能だ。

「待って、怜あんた何者?」

一瞬指が止まったが、最後のキーを押しながら言った。

「ただの六十五歳のじーさんだよ」

「涼宮上官ーロボット兵が全て止まりました。」

「よし、全軍突撃！」

「あの、停止したのは我々も含めて…です。」

「そんな馬鹿な」

×××

『ピンポンパンポーン この放送は日本全国に流れている。』

「この声は西園寺！」

『日本は今分裂している。両軍で戦争を行っている。国民に問う。なぜ十年間も戦ってきたのか？主張を一方に認めさせるためか。違うな。双方で意地を張っているだけだ。そもそも政府が悪かったんだ。つまり、犯人のいないこの日本で被害者同士が争う理由なんてどこにもないんだ。』

―三日後、効果がきれたのか私は元の姿に戻ることができた。しかしそれは私に限ることではなかった。若者軍の九割が工作員の高齢者だったのだ。我々は一体誰と戦っていたのだろうか…。

完